

いま、語りつぐ

平和への願い XII

平和特別講演会の記録 並びに 平和を祈る心のメロディー投稿集



平和モニュメント「火の鳥」

宝 塚 市

発行にあたって

我が国は戦後72年目を迎えました。この間、幸いにも我が国には戦争がなく平和な社会が続いています。しかし、この平和が、未来永劫続くという保障はどこにもありません。恒久平和の実現のため、今、生きている私たちが平和を守り、育て、語り継いでいかねばなりません。

このため、本市は、平和を愛する心の輪を広げ、人々が共に生き、手をつなぎ、助け合う社会を築き、戦争や核兵器のない平和な社会の実現を願って、市民とともに毎年様々な平和事業を進めています。

昨年度は、戦後70年の節目の年に当たり広範にわたる記念事業を実施しました。この度、その中から映画監督大林宣彦さんをお招きして開催した「平和特別講演会」での貴重な講演、並びに、「平和を祈る心のメロディー」に寄せられた平和のメッセージや戦争にまつわる思い出などを本冊子にまとめました。

平和特別講演会では、大林さんから「この空の花～長岡花火物語」の製作や映画での平和づくり活動の体験をとおして、平和に向かってたどる道や映画の持つ力などについて、分かりやすく、優しくそして力強くお話しいただき、一人ひとりが平和をつくっていくことの大切さを再認識しました。

平和を祈る心のメロディーでは、投稿いただいた皆様の貴重な体験や平和への思いを発表するとともに、心に残る思い出のメロディーを神戸・清盛隊ほかの出演者や投稿者の方々に歌っていただき、平和への共感の輪が広がりました。

本冊子作成に当たり、大林宣彦さん、平和のメッセージ等の投稿者の皆様のご理解ご協力にお礼申し上げますとともに、写真等の提供をいただきました長岡市をはじめ各団体及び関係者の方々に心から感謝申し上げます。

この平和冊子を一人でも多くの市民の皆様にお読みいただき、戦争と平和、命の尊さについて考える一助になることを願ってやみません。

平成29年（2017年） 3月

宝塚市長

中川 智子

目 次

1 平成 27 年度平和特別講演会記録	1
第 1 部 平和特別講演会	1
宝塚との縁	1
長岡花火と長岡空襲	2
長岡の米百俵の精神と復興祈願花火	2
「この空の花～長岡花火物語」は映画で描いたエッセー	3
日本の敗戦後の復興はこれでよかったか	4
長岡の方たちが映画に託した平和への思い	4
映画は世界に繋がる	5
パールハーバーで上がった日米合同の追悼花火	6
平和をたどる唯一の道	7
平和の思いが宿る花火	7
映画の力と平和外交	8
Vサインとピースサイン	8
敗戦から学ぶ	9
武器を持たないことが平和	10
映画は風化しないジャーナリズム	10
映画で平和をつくる	11
第 2 部 映画会	12

2	平和を祈る心のメロディー	13
	プログラム	14
	平和の祈り	宇野麗子 16
	思い出	塩江昭子 16
	特別攻撃隊	井上正則 17
	祖父の思い出	ふじだいともこ 17
	思い出	前田 衛 前田真弓 18
	アメリカでの祈り	仁木佳代子 18
	母が遺した「花言葉の唄」	楠 正臣 19
	平和への思い	下原有美子 20
	「里の秋」の思い出	大野敏子 21
	「知らない人のいない街」にしよう	菅波英治 21
	平和への願い	阪本治男 22
	思い出の歌	鞍本恵美子 23
	思い出	小笠原順子 23
	「喫茶店の片隅で」と平和	百瀬秀男 24
	戦後の思い出	斎藤一義 24
	疎開の思い出	丹下一一 25
	私の少年時代	江口忠治 26
3	非核平和都市宣言文	27

出演者等の敬称は省略しています。



終戦70周年記念事業

平和特別講演会

～平和特別講演と平和映画会～

と き 平成27年11月30日（月）午後1時30分開演

ところ 宝塚市文化施設 ソリオホール

第1部 平和特別講演

1 講 師

映画作家 大林宣彦

2 講演テーマ

「戦後70年今平和を語る」

3 講師プロフィール



1938年広島県尾道市生まれ。3歳の時、自宅の蔵の中で出合った活動写真機で映画と出会い、独学で映画づくりを始める。“尾道3部作”と親しまれている「転校生」(80)「時をかける少女」(83)「さびしんぼう」(85)に始まり、全国の古里に残る古き良き暮らしの文化を訪ねて映画を作り、日本の敗戦後の物・金重視の復興のあり方に危惧を表明してきた。

東日本大震災を経た後の古里映画「この空の花～長岡花火物語」(11)「野のなななのか」(13)を中心に、現在は世界中の各都市で上映とトークの会。11月にはニューヨークで尾道3部作を含め特集上映。イエール大学、ハーバード大学などで映画の平和作りについて講演を行う。2004年春の紫綬褒章、2009年秋の旭日小綬賞受賞。NPO日本民家再生協会会長。

4 平和特別講演の記録 「戦後70年今平和を語る」

宝塚との縁

宝塚の皆様こんにちは。今この日本の大切な時期に平和について大切な活動をされて

いらっしゃる宝塚に私が、古里の皆さんと一緒に拵えた映画とその映画に所属しております私をお招き下さったことをとても光榮にそして誇りに思います。ありがとうございます。しばらくお話をさせていただきます。

私は初めてなんです。この宝塚。ずーと憧れの里でした。といいますのも手塚治虫さん、もう長いおつきあいでしてね。「テヅカオサムシ」といっていた頃からですから。そして手塚治虫さんが「僕の漫画のふるさと宝塚なんだよ。一度来てよ」と言われていましてね。息子さんの眞くんはうちの娘と同じ世代でして、親子ともども親しくさせていただいております。今日は手塚さんの古里をも訪ねられたということがとてもうれしゅうございます。今日は時間がございませんので、あんまりそんなことを懐かしんでることができませんけども。

長岡花火と長岡空襲

今日見ていただきます映画、これは長岡の古里映画でして、新潟県長岡市、ここで花火大会をやっていますが、この花火は、毎年8月1日の夜10時30分に「白菊」という真っ白い花火が3発打ち上がるんです。といいますのはね、1945年、昭和20年ですね、日本の敗戦の年、この年の8月1日の夜10時30分にB29という巨大な飛行機がきて、長岡市の8割が焼夷弾攻撃で壊滅した。多くの方が亡くなった。その攻撃が始まったのが昭和20年8月1日の夜10時30分なのです。その同じ時間に毎年ドーン、パーンと花火が上がるわけですね。

上から落ちてドーン、パーンが爆弾で、下から打ち上げてドーン、パーンが花火ですから、実は花火も爆弾も火薬をこね回して弾けさせる。どちらも「散開」、即ち散って開くという同じ字を書くんです。ですから長岡の方たちはですね、戦争を知っているお年寄りの方たちは、私も同年輩ですが、その花火が上がると戦争を思い出すからいやだ。いまだに花火を見ることができない。じゃなんでそんな恐ろしい花火を上げるのかというと、私たち自身は、恐ろしい、忘れたい。もう花火なんかそんな時間に上げて欲しくはないけれど、戦争のことをちゃんと伝えておかないと若い人たちがまた同じ戦争に巻き込まれるかもしれないから。だから戦争の恐ろしさと平和への願い、追悼の気持ちを毎年同じ時間に打ち上げるのだと。

長岡の米百俵の精神と復興祈願花火

そして、続く8月2日3日は、これは2004年でしたか、新潟県中越地震がありましたよね。大きな地震が。この時にも大きな被害を受けました。本当は復興のために1円のお金でもほしいんですよ。道路をつくらなければならない。家を建て直さなければならない。でもその翌年から巨大な花火を、フェニックスですね、不死鳥、永遠に滅びないぞと花火を打ち上げるんです。

花火は空に開いて散ってしまうものですから、もったいないといえどもったいないの

ですが、長岡の方たちは、夜空に咲いて消えてしまったそのあとの暗闇に平和への祈り、これがしっかりと宿るから、消えてしまった後の暗闇の中に永遠の穏やかな日々への思



正三尺玉三連発 慰霊と復興祈願、世界平和の祈りの3つの願いを込めて（提供／長岡市）

いが募るから、それを大人たちがしっかりと打ち上げることで、未来を生きる子どもたちが勇気を持ってくれる。

米百俵というという精神、長岡の精神で、これは、この里に生まれたことを誇りに思い、大人たちの背を見て育ち、そして未来のこの里を賢い美しいまちにつくるんだというね。せっかく貰った米百俵を食べないでお金に換えて学校をつくって、庶民の子まで入れてそれを育てた。そういう辛い負の経験をプラスに変えて、戦争から平和へ、災害から穏やかな日々へと、こういうことを願うという思想が根付いた町、その象徴が長岡花火なんですね。

「この空の花～長岡花火物語」は映画で描いたエッセー

ちょうど私は、2011 年の3月11日東日本大震災が起きましたが、その年にこの映画をこしらえたわけです。実はその2年前の2009年から準備をしていたんです。シナリオも既に出来上がっていたんです。で、いざ撮影しようと思っていたら3・11が起きちゃったんですね。あの瞬間、私たちの心は真っ白になりました。絵描きは絵が描けない。音楽家は音楽をつくれない。

私達もとても映画なんか創れない、という状況でした。でもその時私は思ったんです。映画は何故か2時間内外の劇映画と短編のドキュメンタリーしかありませんね。これちょっともったいない。変だと思いませんか。今皆さんお手元に鉛筆と紙をお持ちですけども、鉛筆で文字を書けば、メモもあれば、手紙もあるし、日記もあるし、もちろん

小説や詩も書けますが、エッセーや論文も書けます。

私は3・11の時に思いました。劇映画も、あんな悲惨なところにカメラを持って入り込み、ドキュメンタリーを撮ることも今はできないけれども、エッセーなら書ける。論文なら書けるだろうということですね。この映画はちょっと普通の劇映画とは違います。でもこれは映画でエッセーを書いたというふうに思っただけであれば、あの3・11を体験した時の、私たちのいろんな混とんとした、整理整頓できない思いがね、忘れないで甦ってくる。

日本の敗戦後の復興はこれでよかったか

そしてあの3・11で私たち学びましたよね。日本の敗戦後の復興は、物と金が優先しすぎて、確かに文明大国それに伴う経済大国にはなったけれども、戦争中にもなかったような親子が殺しあう、子ども同士が殺しあう、道を歩いていたら車が飛び込んでくる、なんだか人々の心が荒れてしましましてね、確かに文明大国、経済大国になったけれども人間がおかしくなっちゃった。これはやっぱり日本の古い文化、豊かな文化、これが失われてきた。

ところがあの東日本大震災の時に、東日本の方たちがね、あの大変な中でも他人のことを思いやり、助け合って復興しようと思ってる。これを見た時に、ああ日本人は本来こうだったんだと。私たちは3・11をもう一遍きっかけにして、日本の敗戦後のモノ、カネ重視の復興をちょっと考え直して、賢い美しい人間として、本当の穏やかな日々、平和を願う人間にともう一遍やり直さなければこの日本の未来はもうないぞという思いに私たちはたどり着いた。そのことを私は論文という形で描こうと思ったんです。

長岡の方たちが映画に託した平和への思い

実は、これは全部事実なんです。だからドキュメンタリーのように論文どおりに書けばそうだったんですけれどもね。それじゃ映画としてのエンタテインメントになりませんし、映画はやっぱりエンタテインメントであることで難しい深刻なこともね、はらはらドキドキしながらより考えやすくより語り合いやすくなるということが映画の素晴らしさですから。



松雪泰子さん ©2011 「長岡映画」製作委員会/PSC

この映画の中に出てくる松雪泰子君が演じる新聞記者さん、あれが実は私なんです。私が体験したことを松雪泰子君に置き

換えて語っています。だからここに出てくるのはみんな実在の人物です。

花火師さんに柄本明君がなりますが、これもほんとの花火師さんの物語ですし、そして、藤司純子さんが演じられます七里アイさんという方、この方もね、昭和 20 年の夜 10 時 30 分に背中に背負っていた幼い長女、まだ 1 歳でしたが、を亡くされるんですね。だから、花火の音を聞くと亡くした長女のことを思い出すから、花火なんかまだご覧になったことがないんです。忘れたいんです。でも忘れてしまうと、未来に生きる子どもたちが再び戦火の中に巻き込まれるかもしれないということですね、語り部になって、一所懸命背中で失くした長女のことを語っていらっしゃる。



講演する大林監督

この役を藤司純子さんが演じるわけですが、実は、映画の撮影が始まったときには七里さんは癌にかかっていらっしゃって、本当は臥せっていなければならなかったのですが、藤司さんの横にずっとついて、長岡の言葉を指導したりね、いろんな気持ちを伝授されておりました。

そしてこの映画の中で、藤司純子さんの話を聞いている子どもたちの姿がたくさん出てまいります。これは実は、七里アイさんが戦争の話をされているのを聞いている子どもたちの話です。だから子どもたちが本当に真剣な顔で、これは映画の中ではない、普段子どもたちがああいう形で戦争を学んでいるんですね。

そして、この映画が出来上がったときに、完成披露試写会を七里アイさんが病院から車いすで見にいらっしゃいまして、こうおっしゃいましたよ。「人の命には限りがあるけれども、映画の命は永遠です。私はこれでもう死にますけれども、私の平和への思いは、そしてあの辛い長女を亡くしたという思いは、2 度とこんなことがあつてはならないという思いは映画という手紙になって永遠に未来を生きる。若い人たちに伝えることができる。私はもう安心して死ねます」と、そうおっしゃってね、亡くなりました。

映画は世界に繋がる

亡くなりましたが、まさに今もこの映画は世界中を回っております。ちょうど今月もアフリカのガーナで上映されていますね。12 月はドイツのミュンヘン。来年 1 月はケルン、というふうに、長岡の一夫人の七里アイさんの平和への思いが、映画を手紙としてね、遺言のごとく、世界中に明日を生きる人たちに平和への祈りを伝えていると。

そういう形の映画ですから、これは商業映画ではございません。映画の製作費も長岡

の市民の方と私とともに 60 年映画をつくってまいりました私の妻、これは東京大空襲でね、逃げまどい、長兄を戦争で、海軍の飛行機乗りでなくしている。そういう私たち戦争を知っている最後の世代が戦争を知らない若い人たちのためにと。

いろんなご縁がありましてね、私さっきびっくりしたんですよ。その七里アイさんの長女は、この映画の中で語られるように、昭和 20 年 8 月 1 日、夜 10 時 30 分の空襲で亡くなれましたが、次女の方が先ほど楽屋に訪ねていらっしゃって、なんと、このビルの上に住んでらっしゃるんですよ。ご縁ですね。本当にいろんなご縁があつていまこの会場にいらっしゃる。この映画が終わったら皆さんでお母さんのために拍手をしてあげて下さい。

パールハーバーで上がった日米合同の追悼花火

そんなことで、映画というのはいろんなご縁があつて、世界中に繋がっていくんです。そして、みなさんテレビや新聞でご存じだったでしょうか。今年、敗戦後 70 年目の年にあのパールハーバーで、長岡花火が上がったんですよ。



ホノルルで上げられた慰霊と平和を祈る花火「白菊」
(提供／長岡市)

実は、長岡の花火は、長岡は山本五十六さん、あのパールハーバー攻撃、奇襲攻撃のリーダーだった方の古里なんです。ところが、山本五十六さんは、本当はアメリカと戦争したくなかった。それをずっと願ってらっしゃったんですね。だから、里の人たちとしては山本五十六さんの本当の意思を継いで、パールハーバーでこの長岡の追悼の花火を、日米合同の追悼の花火としてあげたいと。

私その話を聞いた時はねえ、市長さん、森民夫さんという今全国市長会の会長さんでいらっしゃい

ますが、貴方戦争を知らないから、それはおやめなさい。殺されますよ、そんなことをしたらと。私自身が若い頃、もう平和になったと思ってハワイやアメリカに行くたんびに、1960 年代でしたけど、「ゲット・アウト・ヒヤ・ジャップ。お前らのおかげで親父が殺された。息子が殺された」と言ってね、ホテルを追い出されて、年中野宿をしなければいけないというそんな目にあつて。日本は平和の真っ最中でね、平和だ、平和だといって浮かれているけれども、アメリカじゃまだ戦争が終わってない。あの 2001 年の 9 月 11 日の同時多発テロの時も「リメンバー・パールハーバー」とアメリカでは言っ

ておりましたよね。

そんなところで長岡花火を上げるなんてそれはもうとても不可能だろうと思っていたのですが、実は 2012 年に長岡市はホノルル市と姉妹都市を締結したんです。といいますのはね、長岡の戦争資料館は、単に長岡の被害だけを伝えてないんです。長岡の偉大なる先輩である山本五十六がハワイを奇襲攻撃した。戦争というのは被害だけではない、加害者にもなるから恐ろしいんだという展示をずうっとされてね。ハワイの被害を伝えるオアフの「アリゾナ記念館」と共催しましてね、戦争の加害も伝える、そういう努力をされて、とうとう 2012 年に姉妹都市を締結して、その時にね、実はこの映画もハワイで上映したんです。

平和をたどる唯一の道

怖かったですよ。朝までピストルがこっちを向いている夢。私うなされてました。だって日本が攻撃したんですからね、パールハーバーは。石ぐらいは飛んでくるだろうと。森民夫さんと、市長さんと二人でガタガタ震えながら試写会をしました。日本で見るのとは違ってね、あの戦争は日本が加害者なんですから。加害国の映画を被害国で上映するわけですから。

ところが映画が終わりますとね、私と同年配のご婦人が私の方にサァーと駆けてこられたんです。今でも目をつむるとこんなナイフを持ってらっしゃったように思うんですが、これは私の妄想で、そんなことはなくて、私の手を取るや否やこんなに強く振り回しましてね、「この映画を見ている間じゅう、私の心は嵐のように騒いでいた。でも、映画が終わって冷静に考えたら、貴方はこれから未来を生きるアメリカと日本の若者たちのために、素晴らしいプレゼントをしてくれたと、私はそう信じます。だからあなたにサンキュー・ベリー・マッチを言いに来ました」と言いながら私の目をにらみつけて、「分かりますか、分かりますか、私のこのサンキュー・ベリー・マッチは私の勇気です」と、こうおっしゃいましたね。

戦争とは、無理解と憎しみと欲望が生みますが、平和とは、敵を許す、許しあってともに未来の穏やかな日々をつくろうという勇気、時間はかかるけれどもこれが平和をたどる唯一の道、映画がそのことに役立ったということに私、映画人として大変うれしい思いをしました。

平和の思いが宿る花火

そしてその夜、長岡花火をホノルルの海に打ち上げましたが、雨の中でしたがね、アメリカの若いカップルがそれを見ながらこう言いましたよ。「アメリカの花火は爆弾みたいにパーンと散って、パーンと消えるけど、日本の花火はなんかしんなり咲いて、しんなり散って、散った後の暗闇に何か思いが宿るねえ。優しくならなければいかんという人間の気持ちが宿るねえ」と。

これがこの花火をつくられた、シベリアで抑留された経験を持つ日本の花火師さん、嘉瀬誠次さんという方ですが、追悼の花火はゆっくりとしんなりと咲いてしんなりと散って、散った後の暗闇にこそ平和の思いが宿る花火。

そして今年、そういう努力が実ってね、敗戦後 70 年、ようやくあのパールハーバーで長岡の花火が、日米合同の追悼の花火が 3 発上がりしました。1 発目はこの土地で亡くなったアメリカ人のために、2 発目は日本で亡くなった日本人のために、3 発目は未来をとともに平和をつくって生きるアメリカと日本の若者たちのためにと。

映画の力と平和外交

それが敗戦後 70 年、これでもう戦争を知っている世代も私なんかが最後ですから。もう終わってこれから新しい平和元年になる年だと思っていましたら、平和元年なんだか、また新しい戦争の年が始まるんだか、ということになってしまいましたね。

この映画をつくりました 2011 年には、この映画の中では「まだ戦争に間に合いますか」という言葉がありますけれども、これは次に起こる戦争をとどめる力を私達が得るために、この長岡花火の思いがまだ間に合いますかということでしたが、なんとほんとにこの言葉がね、今、力を持つ時代になったということがとても恐ろしゅうございます。

この映画の中にも出てまいりますけどね、パールハーバーの後マーシャル諸島というところに参りましたよ。ここは 1954 年の 3 月 1 日に、広島に落ちた原爆の 1000 倍の放射線をまき散らしたビキニ環礁のね、水爆実験。日本の第五福竜丸を始め、多くのマグロ漁船が被爆しましたけどね。アメリカから 200 万ドルの補償金をもらって無かったことにしちゃったんだけどね。マーシャル諸島は今も生活様式が主に雨水ですから、その天空を放射線で汚したらどうということになるでしょうね。

実は、この映画、マーシャル諸島でここ数年、毎年 3 月 1 日に上映されてまいりますね。ロヤック大統領に招かれて今年私達もまいります、この映画をこしらえました市民の方たちと一緒にロヤック大統領とともにこの映画を観まして、映画というものは本当に外交、平和外交に役立ちます。映画をつくった街の一般の庶民の方たちがね、大統領と同じテーブルを囲んで肩をたたきながら平和を語り合おうと。

Vサインとピースサイン

時に、どうです皆さん。ビキニの水着を着られますか若い方は。ビキニの水着という



東京都立第五福竜丸展示館に展示されている第五福竜丸（提供／公共財団法人第五福竜丸平和協会）

のはフランスにムッシュ・ビキニというデザイナーの方がいたんじゃないんですよね。あの水爆実験。広島は1000倍の水爆実験。ビキニの水爆実験、度胆抜かれたぞお、という年に、日本の女性が下着のような水着で泳ぎだしたので、度胆抜かれたぞお、まるでビキニの水爆実験のように度胆抜かれたぞ、というので、あれはビキニの水着ということになっちゃったんですよ。

そして、ビキニの水着を着て、こうしてピース、ピースと皆さん写真撮られますでしょう。私アメリカで、ハーバードやイエールやウィリアム・アンド・メアリーというアメリカの東海岸で古い方から1番2番3番という大学でこの映画を上映しながら平和の話をしてまいりましたが、そこでね、ビキニを着てピースとやっている女性の写真を見せて、これどういう意味ですかと聞くと、「あー、日本の女性がビキニの水爆実験のおかげで、社会主義国ではなくて、自由圏のアメリカ側の人間になって、広島・長崎の原爆のおかげで平和になったとって喜んでいいる」という。そうなんですよ、これ世界の常識なんですけどね、これはVフォー・ヴィクトリーで勝利のVですよ。ピースのPじゃないですよ。

同盟国のイタリアをやっつけた時に、チャーチル首相、イギリスの勝った国の首相がVフォー・ヴィクトリー、勝利のVだ。次にドイツをやっつけた時に、Vフォー・ヴィクトリー、勝利のVだ。そして日本をやっつけた時に勝利のV、今度こそ本当の勝利のVだ。とこうやったんです。

で、新聞記者が「今度こそは本当の勝利のヴィクトリーですね」と言ったら、チャーチルさんが「いやいや日本の場合は広島と長崎の原子爆弾のおかげで忌まわしい戦争を早く終わらせられて平和になったからピースだよ」と。

これがこのピースの由来なんですよ。



水爆ブラボー実験 1954年3月1日 米軍撮影

(提供／公共財団法人第五福竜丸平和協会)

敗戦から学ぶ

だからほんとに今でも53%の人間がそう信じているアメリカの人たちがこれをピースというのは頭では理解できますが、被爆国である日本人までが広島・長崎のおかげで平和になったよね、ビキニの水爆のおかげで自由圏だよねと言っているのは、あまりにも私たちは敗戦を学んでない。

終戦の日というでしょう。戦争は終わらないんですよ。勝つか負けるかしらないんです。あれは正しくは敗戦の日だったんですが、日本人は敗戦を学ばないで、戦勝国アメリカの言うことを聴いて、スクラップ・アンド・ビルド、古いものは壊して、新しくし

ようというのでね、あの戦争でもまだまだ残っていた日本の美しいものを日本人の手で壊してお金に換えてきた。

そして、アトムズ・フォー・ピース、原子力の平和利用。原子力発電をつくろうと。すべて戦勝国が言うがままに日本は復興して来て、本当に負けた国だからこそ学ばねばならない戦争の忌まわしさを、私たちは勝利のVが平和じゃなくて、戦争がないことが平和だということをね。私たち日本人、敗戦国であるがゆえに。

憲法9条がそうでしょう。あれ、敗戦国だからもらえた。押し付けられてもいいじゃないですか。敗戦国だからこそ軍隊がない、軍隊を持たないという法律ができたんで、世界中がこの法律を持っていたら、憲法を持っていたら、世界から戦争がなくなるんですがねえ。

武器を持たないことが平和

勝った国は、次はどこをやっつけようかでしかないんですよ。だからどこまでいったって、Vフォー・ヴィクトリーなんです。でも私たちは敗戦国、負けることによって戦争の忌まわしさを学んだ国ですから、もう武器を持たないことが平和なんだと。いうことをこそ学ばなければならぬ。そこに非核宣言ということの大きな意味もあるわけです。抑止力なんかになりません。持たないことこそが抑止力なんです。

武器を持って敵を脅かして抑止力なんて言っていると、どっかでそれは事故を起こして暴発して取り返しのつかない戦争になっちゃうんです。だから、私たちは核は持ちません。拳銃も持ちません。何にもいりません。それが本当の平和なんですよね。そこに必要なのは、平和への勇気だけです。

映画は風化しないジャーナリズム

というところでお約束の時間がきてしまいました。あっという間に時間がたちますが、まあ、この後の映画がそういう意味で、これはエッセーですから、私自身の講演の続きだと思ってご覧いただければと思います。

一見見慣れないややこしい映画のようですけれども、実は、小学生、中学生がこの映画を見ると、本当によく理解してくれるんです。彼らは映画だと思って見ませんから。ここにあることを事実だと思って、そしてそれをより面白く、楽しく語ってくれるのが映画だと。

映画は実は風化しないジャーナリズムなんです。本当に恐ろしいものは忘れたい、忘れてしまったほうが楽だってこともあって風化しちゃうんですけれども、映画はそれを心の物語に変えてハラハラドキドキ。時には怒ったり、泣いたりしながらも、でも面白く楽しく考えることができる。そして語り合えることができる。だからいつまでも大切な、嫌なことまでもが記憶の中に残って、嫌なことを忘れないで繰り返し繰り返し、考えて考えて語り合うからこそ、平和というものを手繰り寄せることができる。

映画で平和をつくる

そんな意味でね、今日この映画をご覧いただいた後、皆さんで語りあって、未来の平和をつくっていきましょう。もう、もう人類はほんとの平和をつくることができなきやいけませんよね。そういうことがね、小さな小さな一歩ずつですがね、私達がそれをつくっていくことがね、平和になるわけですから。どうか皆さん一緒にがんばりましょう。

そんなわけで私は、Vフォー・ヴィクトリーのVサイン、これではなくて、いつもアイ・ラブ・ユー、これは手話の表現でね、アイ・ラブ・ユー、世界中共通の言葉です。そして皆さんの日々の生き方が、お掃除をするのでも、恋愛するのでも、親子げんかをするのでもなんでもようございしますが、このひと時が世界の平和をつくっているんだよということを、アイ・ラブ・ユー・マークをつくって、Vサインのピースマークは、これはやめましょうね。これに代わるこれになるようなことをね、みんなで一つずつつくっていく、それがこの宝塚の里の平和づくりの第一歩にでも役立っていただければと思います。



講演会の様子

そんなわけで、「この空の花〜長岡花火物語」、長岡市民と私のプロダクションのわずかばかりのお金で作られた映画ですが、こうして皆さんに招かれて、こうしてここに上映できますし、世界中の人たちに平和への祈りを続けておりますので、どうか皆さんの心のスクリーンでこの作品を素敵な映画にしてくださればうれしいと思います。

今日はこの宝塚にお招きいただいて、同じ平和を、私、映画をつくっている人間じゃないんです。映画を使って平和を手繰り寄せることに何か役立たないかと思っていますので、私達が長岡市民と一緒に拵えましたこの映画をご覧になって、どうかこの映画が使い勝手があれば、これを使って皆さんの日頃の平和を手繰り寄せるお考えの一助になればと思いますので、どうかよろしくお願いします。今日はほんとうにありがとうございました。

第2部 映画会

作品

この空の花～長岡花火物語

監督

大林宣彦

脚本

長谷川孝治 大林宣彦

製作プロデューサー

大林恭子（PSC）

渡辺千雅（「長岡映画」製作委員会代表）

製作

「長岡映画」製作委員会 PSC ©2011



©2011「長岡映画」製作委員会/PSC

出演

松雪泰子 高嶋政宏 原田夏希 猪股南 寺島咲 笕利夫 森田直幸 池内万作
笹野高史 石川浩司 犬塚弘 油井昌由樹 片岡鶴太郎 藤村志保 尾美としのり
草刈正雄 柄本明 富司純子 ほか

内容

長岡を訪れた地方紙記者の女性が体験する不思議な出来事を通し、長岡空襲や新潟県中越地震を乗り越えてきた長岡市を舞台にした人間ドラマ。

終戦70周年記念事業

平和を祈る心のメロディー

と き 平成28年1月10日（日） 午後2時開演

ところ 宝塚市文化施設ソリオホール

内 容 平和や戦争に関わる思い出やメッセージなどとそれにまつわる曲を公募し発表することにより、平和の大切さ、命の尊さを再認識する場とした。発表は、思い出などは応募者又は司会者、歌は歌手又は応募者が行った。

出 演 神戸・清盛隊



2011年9月29日結成。2012年1月21日～2013年1月14日神戸市観光キャンペーン事業として活動。任期満了につき一旦活動を休止するも復活を願う署名活動などもあり、2013年5月3日復活。復活ライブは大盛況となった。

神戸まつり出演や北野工房のまちで定期演舞を開催。遠き平安の時代に、天下泰平を強く望んだ平家一門が今、この平成でさらなる平和と人々の笑顔（笑顔）を広げようと活動しています。

応募者以外の出演者

MAO&NOZOMI 吉永真悟 MORIHINA Victoria TAKARAZUKA

進行・ナレーション 木原幸尚 岸ゆきみ(アシスタント)

構成・演出 吉永真悟



岡山市出身。宝塚市在住。京都教育大学教育学部音楽科卒業。作曲家、音楽プロデューサー、ボイストレーナー。芸能スクール主任講師を経て2005年ボイストレーニングスクール「Voice Master」設立。ミュージシャン、タレントへの楽曲提供・プロデュース、CMソングの作曲、NHKや岡山放送などへの番組出演、企業や各種団体へのテーマソングの提供、メジャーレーベルのオーディション審査員など幅広く活躍している。

プ ロ グ ラ ム

- 1 演舞 神戸・清盛隊
- 2 ごあいさつ 宝塚市長
- 3 故郷（作詞：高野辰之 作曲：岡野貞一） 神戸・清盛隊
平和の祈り：宇野麗子
*戦時中幼かった世代にとっては、平和への願いと共にある歌です。
- 4 故郷を離るる歌（訳詞：吉丸一昌 作曲：ドイツ民謡） MAO&NOZOMI
思い出：塩江昭子
*戦火に焼かれ故郷を離れた当時の記憶と共に。
- 5 いつでも夢を（作詞：佐伯孝夫 作曲：吉田 正） 神戸・清盛隊
特別攻撃隊：井上正則
*戦後の日本人の人々に長く愛されている歌です。
- 6 椰子の実（作詞：島崎藤村 作曲：大中虎二） 神戸・清盛隊
祖父の思い出：ふじだいともこ
*南の島で戦死した友を思っ。
- 7 カノホナピリカイ（作詞：ケアリイ・レイシエル 作曲：BEGIN） 前田衛・前田真弓
思い出：前田衛・前田真弓
*亡き人を悼む気持ちに国境はありません。
- 8 にんげんをかえせ（作詞：峠 三吉 作曲：千葉孝子） 千葉孝子・蒲田美代子・仁木佳代子
アメリカでの祈り：仁木佳代子（ハートフル コーラス）
*強く強く、平和を願います。
- 9 原爆を許すまじ（作詞：浅田石二 作曲：木下航二） MAO&NOZOMI
宝塚市平和事業検討委員会推薦歌
*「二度と繰り返してはならない」と痛切に歌います。
- 10 花言葉の唄（作詞：西条八十 作曲：池田不二男） 神戸・清盛隊
母が遺した「花言葉の唄」：楠 正臣
*戦争の暗い影が落ちる世相の中で明るく響いたワルツです。
- 11 いのちの理由（作詞・作曲：さだ まさし） 神戸・清盛隊
平和への思い：下原有美子
*生まれてきたことの素晴らしさを語りかける歌です。

~~~~~ 休 憩 ~~~~~

- 12 里の秋 (作詞:斎藤信夫 作曲:海沼 寛) 神戸・清盛隊  
「里の秋」の思い出 : 大野敏子  
\*戦争で傷ついた人々を励ますために作られた歌です。
- 13 隣組 (作詞:岡本一平 作曲:飯田信夫) 神戸・清盛隊  
「知らない人のいない街」にしよう : 菅波英治  
\*戦前から親しまれ続けるメロディです。
- 14 海行かば (作詞:大伴家持 作曲:信時 潔) 吉永真悟  
平和への願い : 阪本治男  
思い出の歌 : 鞍本恵美子  
\*戦争の記憶と深く結びついた歌です。どう向き合い、伝えていくか。
- 15 リンゴの唄 (作詞:サトウハチロー 作曲:万城目正) 神戸・清盛隊  
思い出 : 小笠原順子  
\*戦後のヒット曲第1号。戦後と復興の象徴となる歌。
- 16 喫茶店の片隅で (作詞:矢野 亮 作曲:中野忠晴) 百瀬秀男  
「喫茶店の片隅で」と平和 : 百瀬秀男  
\*戦時中では考えられなかった平和な情景が描かれています。
- 17 ハナミズキ (作詞:一青窈 作曲:マシコタツロウ) 神戸・清盛隊  
戦後の思い出 : 斎藤一義  
\*憎しみの連鎖が終わり、平和が続くことを願う歌です。
- 18 誰か故郷を想わざる (作詞:西条八十 作曲:古賀政男) MORIHINA  
疎開の思い出 : 丹下一一  
\*兵士が故郷を思い涙した歌です。
- 19 春が来た(作詞:高野辰之 作曲:岡野貞一) Victoria TAKARAZUKA  
私の少年時代 : 江口忠治  
\*「故郷」と同じく、世代を超えて馴染みの深い歌です。
- 20 上を向いて歩こう (作詞:永六輔 作曲:中村八大) 全員で  
\*日本だけでなく、世界中を元気にした名曲です。

(敬称略)



## 1 平和の祈り

宇野麗子

昭和20年6月に大阪大空襲があり、大阪で育った私は、父母の故郷である広島県呉市へ母と姉とともに疎開しました。そして8月6日、あの原子爆弾。ピカッと光り、耳はツーンとふさがりました。しばらくすると、雲一つない綺麗な青空にきこの雲がぽっかりと浮かんでいました。その光景は、今も脳裏に焼き付いております。今思うとその下は悲惨な情景だったのですネ。

また、叔父の戦死の公報を受け取った母は、豪涙でした～!!

今年の70周年平和記念行事に、私も末広中央公園に参加させていただきました。

テレビ、ラジオなどで思い出したくない場面の多かったこと、心が痛む毎日でした。だから、今の社会情勢はとっても気になります。あまりにもむごい体験を子どもや孫たちにはさせたくないとい心の中で叫び続け、また、平和の祈りを毎日神仏様に祈念しています。

“故郷”の曲が流れてきますと13歳の私に戻るのです。そして、戦争だけはしないで～!!～と願うのです。



松山市上空から米軍機から撮影したきのこ雲  
(HG273 撮影／米軍 提供／広島平和記念資料館)

## 2 思い出

塩江昭子

ふるさとは、生まれ故郷は勿論のこと、育ったところ、そして心のふるさと、もあります。

私は、神戸御影幼稚園の頃からの思い出、が心のふるさとです。そして、戦時中の御影小学校3年生の時、戦火で焼野原となって、家が焼失いたしました。家族の住まいを見つけるのに、阪急六甲と旧国鉄六甲道駅の間を、二度も転入転出をして、父母の労苦を、まのあたりに致しました。父の故郷は雪深い京都の山奥ですが、母はまた南国の愛媛県で、二人はどんなえにしで結ばれたのか、今となっては、もう知る由もありません。只、手元に残っている写真に、親せき縁者に囲まれて、幸せそうな若き日の母を見て救われます。

私達姉妹は歌が好きで、中でも「故郷を離るる歌」を、私がアルトを受け持ってよく合唱をしました。一番の歌詞は、今でもよく覚えていて、日頃口ずさんでおります。

### 3 特別攻撃隊

井上正則

平和や戦争となると海軍飛行予科練習生、当時の特別攻撃隊の名の元に若い命を失っていった時代の同期の桜の歌を思い出します。「貴様と俺とは同期の桜。同じ航空隊の庭に咲く。咲いた花なら散るのはかくご」… しか頭に残っていません。昭和 51 年より平成 22 年迄甲飛同期会 35 年続けてきました。その間、大阪護国神社、宝塚聖天護国慰霊祭等に参加してきました。

一般の世界で歌われている歌謡曲は、一切歌った事はなく、カラオケ等にも一回も行っていない。それは、特攻隊の名の元に若い命を失った人達が頭にうかびそのような気になれないからです。彼達の最後の言葉は、「おかあさん」であったと聞いています。

歌といえば 80 年前の小学生時代の童謡、「春の小川」「チュウリップ」等が思い出されます。戦後の歌で好きな歌はたくさんありますが、一曲となると橋幸夫さんの「いつでも夢を」になります。

国破れて山河ありと云いますが、二度と戦争は起こしてはなりません。幸せな文化とたのしい人生を送りましょう。



### 4 祖父の思い出

ふじだいともし

祖父は南洋の島で戦争をしていました。

小学生だった私に、祖父は戦争の話をしませんでした。思い出したくないほど、辛く悲しい体験だったようです。

かわりに、南の島での楽しい思い出話をしてくれました。戦時中の話か、戦後に遺骨収集で訪れた時の話か、今では定かではありません。

当時、田舎では珍しい椰子の実をどこからか手に入れ、割って椰子のジュースを飲み、実は炙って食べました。食べ慣れない異国の味と、喜ぶ祖父が印象に残っています。

「椰子の実」は、祖父の好きな歌です。ふるさとを離れ、南洋で戦死した友を思い出していたのではないのでしょうか。

大人になり、祖父が他界してから、旅行で南洋を訪れました。日本軍の残した大砲に太陽が照りつけ、南の島は静かでした。平和の美しさを強く感じました。

## 5 思い出

前田衛 前田真弓

「なだそうそう」は、沖縄出身のバンド「ビギン」が作曲し、森山良子が亡き兄を偲んで作詞した曲で、親しい人を亡くした人の心に強く響いて、大ヒットしました。10年程前のことです。

ハワイのフラの先生で、シンガーでもあるケアリィ・レイシエルが日本からハワイにもどる飛行機の中でこの曲を聴き、歌詞の意味はわからなかったのですが、曲に感動し、偶然にも天国のおばあさんを懐かしむハワイ語の歌詞をつけ、メロディーをすこしハワイ風にアレンジしてハワイ語バージョンの「なだそうそう」を作りました。

それが「カノホナピリカイ」。フラ曲としてハワイでも大ヒット。フラに親しむわれわれ夫婦は、お気に入りのビギンの曲が、大好きなフラの曲に生まれ変わったこの曲を初めて聞いたとき、二重の感動を味わいました。亡くなった人を偲ぶ気持ちは国が変わっても同じなんだなぁと改めて気づき、歌うたびに命の大切さを思い出させてくれる曲となっています。



## 6 アメリカでの祈り

仁木佳代子

(朗読：石本恵美子 門脇美智子 武内貴和 岩佐順子 松山五郎)

皆様方は、遠いアメリカ・ワシントンDCの地で、30数年前からずっと、広島・長崎に原爆が落とされたその日・その時刻に黙祷をして下さっているアメリカの方々がいらっしゃることをご存じでしたか。

昨年、私たちは始めてそのことを知り、被爆国民でありながら、ともすれば戦争を風化させがちにしていた自分たちを恥じました。

そして、なんとしてもワシントンに行って、日本人として感謝の気持ちを伝え、共に平和を祈りたいと思いました。

その思いが「被爆者2人とハートフル合唱団員15人の訪米」という形で実現しました。

アメリカでは、8月5日の午後7時15分が広島に原爆が落とされた時刻、8月8日の夜10時3分が長崎に原爆が落とされた時刻です。

こんな夜遅くにアメリカン大学やホワイトハウスの前で黙祷し、平和を祈ってくださっている人たちがいるのです。

私たちは共に黙祷した後、二人の被爆者が自分の被爆体験をお話しし、感謝の気持ちを込めて歌いました。

私たちの歌は「原爆許すまじ」「にんげんをかえせ」と、日本の美しい童謡や宝塚の「すみれの花咲く頃」でしたが、日本のメロディーは素晴らしいと、どの会場でも感動して頂きました。

そして最後にジョーンバエズの「ウィシャル オーバーカム」を歌い始めると、全員が立ち上がり、腕を組み手を取り合って一緒に歌うのでした。

日米両国民が平和を願う心でつながり合えた10日間でした。



## 7 母が遺した「花言葉の唄」 楠 正臣

この唄は映画「初恋日記」の主題歌で、母が台所仕事をしながらよく口遊んでいたが、もう七十餘年も前のことになる。

父は軍人で、当時植民地であった台湾の部隊に属していたため、私は台北で生まれ、戦後引き揚げて帰国するまで台湾ですごした。昭和13年5月1日、私が物心のやっとなつて四歳の頃、父は当時の日支事変に出征した。その勇壮な馬上の姿を、生後二か月の妹と母方の祖母、姉妹達大勢で台北駅に見送ったのを、当時の写真を頼りにうっすら覚えている。

それからは、毎朝父の写真を前に無事を祈る母子三人の寂しい暮らしとなった。やがて官舎を明け渡して祖母の家に厄介になることとなった。その間、聴きおぼえたのがこの唄である。

やがて昭和16年12月、太平洋戦争に突入し、父は中国からフィリピンへ、そしてさらに南下した。時折父からの便りや南方の珍しい品々が届いていたが母の父を思う心中は如何ばかりであったろう。

天の恵みか父の強運か、18年の暮れに父は無事台湾に戻ってきたが、半歳足らずで戦火は本土にも及び、軍人家族は山中に疎開することとなり、再び父とは離ればなれになって、軍歌の喧々騒々の時代となるや母の唇からこの唄はなくなった。

こんな戦中の思い出尽きぬこの唄を 私も戦後 青春時代に謳い 今猶閑かなラウンジでは時折謳っている。

平和とは何か。

戦後70周年を過ぎて、なお平和への思いが強くなります。

今なお、世界中では紛争やテロが起きていて、日本も、いつまで戦争と縁のない国でいられるのか、不安になってきました…。

誰もが、ささやかな自分の暮らしを大切に生きています。ほんの小さなことで悲しんだり、落ち込んだり、喜んだり、うれしくなったり。

今日はあまりいい日じゃなかった、でも明日はいいことがあるかもしれない。

今日はすごくいいことがあった、だから明日はもっといい日になるかもしれない。そんな思いで生きています。

平和とは。

「未来」がやってくることを疑わずに信じられることだと思います。

「いま」が明日に繋がり、「未来」は「いま」の延長線上にある。

誰もが、輝く「未来」を信じて、「いま」のいのちを大切に生きていけますように。悪意ある暴力や残虐な行動で、「未来」が摘み取られることがないように。

未来世代に、平和のバトンを引き継いでいくのが、いまを生きる私達の使命だと思いました。





## 9 「里の秋」の思い出

大野敏子



昭和14年生まれの私は、コーラスなどで「里の秋」を歌う度に、何故か他の歌では感じない悲しく淋しい思いが込み上げて涙が出るのです。ある時、今は亡き7歳上の姉にこの事を打ち明けたところ、姉は私が4,5歳の頃、裁判所勤務だった父が当時、家族が住んでいた佐世保から軍事裁判所の仕事で海軍の船で南方へ行ってしまった時の話をしてくれました。母は父がいなくなり淋しくなった我が家で私を寝かせながら、よく「里の秋」を唄ってくれていたそうです。

特にこの歌の3番の

さよなら さよなら 椰子の島 お船にゆられて帰られる

あゝ父さんよご無事でと 今夜も母さんと祈ります

の所を母はきっと子供の手前、涙を抑えて父の無事帰国を心から祈りながら、私にこの歌を歌ってくれたのだらうと思います。その時の母の淋しい、やさしい心が幼かった私の心に残っていて、今でもこの歌を歌うと涙が出るのだと思います。

父はこの母の祈りがかなって終戦からほぼ一年後帰ってきてくれました。

淋しい中、四人の子供を無事育てた母の苦労を思うと戦争はどんな理由があろうと避けたいものです。

## 10 「知らない人のいない街」にしよう

菅波英治

語り継ぐ～平和の礎

平和への思い！

「知らない人のいない街」にしよう！！

♪ トン トン トンからリット 隣組！

格子を開ければ 顔なじみ

この唄は、私が4～5歳の頃に 町内会などで 口ずさんでいた懐かしい唄です。その頃は、住んでいる街で 知らない人など いませんでした。

ところが、敗戦から70余年過ぎようとしている今はどうでしょう？  
同じ町内は元より、マンションやアパートなど集合住宅でも、“隣に住んでいる方”とのお付き合いもなく、知らない人の集まりや交流の場など無い状況です。

それは、個人情報保護法や情報を悪用した詐欺事件などの影響も大きいと思



います。

そんな状況で、「平和への思い」を考えますと

- (1) わが街を安全で、安心して暮らせる「知らない人のいない街」にしたいなあ！と思っています。

そうすれば、一人暮らしのお年寄りと地域の皆さんとの絆にもなり、生きがいにもなり、「孤独死」という あってはならない悲劇も避けられると思います。

- (2) その「知らない人のいない街」にするには、お互いに支えあう“交流の場づくり”が必要かと思います。それは、私たちの“話の集い”です。

- (3) 「散るさくら 残るさくらも 散るさくら」＝良寛の俳句のとおり、いま咲いているさくらもやがて散ります。

この世に永遠はありません。夫婦でつつましく暮らしている或る日、一人が浄土へ旅立つ日が来ます。

そんなとき、地域のみなさんとの交流は孤立を防いで 有り難いことです。

## 11 平和への願い

阪本治男

私が学徒勤労働員で勤務していた軍需工場は、昭和20年8月10日の夜、B29の爆撃によって壊滅しました。翌朝出勤した時にその無惨な姿を目撃したのですが、勤務時間中に空襲警報が発令された時に私と数人の級友とがいつも潜り込んでいた防空壕は、木端微塵に吹き飛ばされて影も形も無くなりました。もしその爆撃が夜ではなく勤務時間中に実施されていたら、私も級友たちも皆バラバラ死体となって空高く吹き飛ばされていたはずです。

戦争が始まったら、このような生き地獄が際限なく広がっていきますから、戦争は何としても回避しなければなりません。しかし、戦争は国と国との対立

から始まるのであって、一人相撲ではありませんから平和を守るためには日本国民が二度と戦争はしないと固く決心するだけでは足りないのであって、国際環境の変化に対応して他国から攻められるのを防ぐための抑止力確保にも努めなければなりません。



思い出の曲は、当時、卒業式などでよく歌われていた曲です。

## 12 思い出の歌

鞍本恵美子

海行かば。この歌は、よく知られているように万葉集の中の大伴家持の長歌の一部に曲をつけたもので、終戦当時、八歳であった私にはとても難しいものであったが、それでも私がそれを覚えているのはあまりにも美しい曲だったからであろう。

一度、私より十歳くらい年長の男の人の前で、私がうっかりこの歌を口ずさんだところ「やめてくれ」と叱られたことがある。その年代の人にとっては、生々しい戦争の記憶に直接つながる歌であったのだろう。

この美しいメロディーには人を死へ誘う力があると私は思う。他の多くの勇ましい曲とはちがって格調高く悲しみをたたえた名曲であり、戦に出で立つ若者の心を打つ、それゆえに罪深い曲であると思う。が、戦に散った三百万人の人々の鎮魂のために忘れてはならない曲でもあると思う。

## 13 思い出

小笠原順子

広島に原爆が落とされた時、私は広島県賀茂郡の郷田村に疎開していました。5歳でした。母と下の兄と一緒にでした。父と上の兄は山陽線の西條駅のある西條の町から広島市の専売公社と修道中学校へ通っていました。

8月6日、広島へ原爆投下の日、村の人たちは「広島のがスタンクが爆発したげな」と言っていました。その日、父は広島専売公社の建物の中で被爆しましたが毛布をかぶって西條まで歩いて帰ってきました。上の兄は学校が夏休みで無事でした。こうして広島市民だった私の家族は原爆の被害をこうむることなく全員無事だったのです。



広島産業奨励館（原爆ドーム）と爆心地付近

(HG405 撮影／米軍 提供／広島平和記念資料館)

8月15日、天皇陛下の敗戦のラジオ放送を聴き、それから戦後の闇市生活が始まりました。その頃、ラジオから流れてきた歌が「リンゴの唄」でした。ラジオ以外には何もない時代の懐かしい思い出の歌です。

この歌は、昭和 30 年にレコードが発売されヒットしました。小学校に上がるか上がらないかの年齢だった私にはリアルタイムでの記憶はありません。

私は、昭和 24 年に長野県松本市で農家の三男として生まれました。歌好きな母は家事をしながら色々な歌を歌っていましたが、とりわけこの歌をよく歌っていました。

小学校高学年になったある日、この歌を口ずさんでいる母に「母ちゃんこの歌よく歌うよね」って言いました。すると母は歌うのをやめ、「秀男お座り。お前が生まれる数年前には太平洋戦争があり、このあたりも都会から疎開する人達でいっぱいだったんだよ。松本は空襲こそなかったけれど、父ちゃんは召集されるし本当に大変な世の中だったんだよ。でもねこの歌を聞いた時に、恋人同士が喫茶店でお茶を飲む平和な世の中ってなんて素晴らしいんだろうと実感することができたんだよ。だからいつまでも戦争のない平和な世の中が続きますようにとの思いを込めて歌っているんだよ」といいました。私は小さくうなずきました。目にうつすらと涙をためて話す母の顔を見た時、この歌と平和が私の心に深く刻まれました。

最近の世の中を見た時、私はこの歌を歌おうと強い気持ちが湧き上がってきました。



私は、終戦の年に生まれた 70 歳。幼い頃、食糧配給切符があったことや靴磨きをする戦争孤児、身体を損ねた傷痍軍人の方などを覚えている。

長じて成人となり、高度経済成長期、職場での宴席では歌も出てくるというもの。アイ・ジョージという歌手も渋い声で歌ってた。♪ここはお国の何百里離れて遠き満州の…友は野末の石の下…♪どこか切ない哀愁をおびたもので、私も唄った。ある時、20ほど先輩から教えられた。「この歌は、兵士の厭戦気分が込められたものだ」と。

その先輩が唄うのは、明るく、陽気なアップテンポ、英語の歌だった。戦前の圧政から解放され、自由を謳歌できた。戦後青春歌だった。楽し気で、聞く者も心地よかった。

諸国国民へ惨禍をもたらした前の戦争は、日本国民も同様に苦しめた時期だった。

戦後 70 年の今年、こんな短歌が目にとまった。

「牡丹江の河に棄てたる幼な子の溺れるさまを君泣きていふ」

戦後引揚者の様子である。

いま私も詠もう。

「戦後世の結節点に今あらん憲法に恥じぬ主権者たれよ」

## 16 疎開の思い出 丹下一一

この歌は太平洋戦争が終結して一年、母の縁故を頼って名古屋より雪深い三重県員弁郡上笠田村へ疎開した頃に六つ年上の兄と一緒に口ずさんだ思い出の歌であります。題名も意味も知らずに歌っていました。

当時、私は小学校五年生、兄と一緒に毎日山を開墾してサツマイモの畑を作りました。畑仕事が終わると家までの一里、約四キロの道のりを兄とリヤカーを引きながらこの歌と一緒に口ずさんだものでした。そのやさしかった兄はもういません。

「花摘む野辺に 日は落ちて  
みんなで肩を 組みながら  
歌を歌って 帰る道  
幼なじみの あの子もこの子も  
ああ ああ  
誰か故郷を想わざる」



提供／成瀬國晴 学童集団疎開「時空の旅」より

私、昭和6年4月10日、大阪府中河内郡三野郷村（現在八尾市）に生まれ、84歳。昭和12年7月7日、日支事変勃発。子どもの頃の遊びは兵隊ごっこやチャンバラ、かくれんぼぐらい。翌年父の弟が中国で戦死。16年12月8日、太平洋戦争。日本は奇襲攻撃、ハワイ、朝からラジオで軍艦マーチと共に大本営発表「今8日未明我が帝国陸海軍は西太平洋において米英両国と戦闘状態に入れり」。小学校4年でした。この年から、小学校から国民学校に変更。昭和天皇実録によると、戦争を回避するべく努力されたが、当時、軍の力が強く、戦争に突入。我々国民は引き込まれ、私達は軍国少年の教育。

6年生になって、旧中学校の入試、私のクラスは男63名、中学校に進学したのは20名足らず。伯父がこれからは飛行機の時代、府立航空工業学校3名受験、全員合格。

19年後半になり、米軍の空襲が多くなり、警戒警報で帰宅する途中、生駒山の方から敵機グラマンが私の方を目がけて来る。自転車を放り投げ、田んぼに寝転び、途端に機銃掃射。危ないところ助かった。米兵の顔見えた。

父は田舎に疎開するかと、まだ行った事もない、高知、中村中学校に転校。手続きに正月休みに13歳の一人旅。3月になって、家族3人で疎開。家財を積んだ大叔父の持ち船が3月13日の大阪大空襲で船諸共焼けた。4月、2年生、往復14キロの砂利道、藁草履で通学。帰路1年先輩5名が待ち伏せ、「大阪弁を話せ」でいじめに。8月になって、広島、長崎にとてつもない大きな爆弾が落ちた。これが原爆だった。

8月15日、今日は天皇陛下の大事な話があると、12時前に運動場に整列。12時、天皇の肉声途切れ途切れに敗戦の詔勅。我々国民は、食糧（米）衣料品は配給切符だった。「ほしがりません勝つまでは」「一億一心」のスローガンのもと、我慢してきたののがっかりした。

気持ちは味わった人でないとわからないと思う。

私の家系は3名戦死者が出ました。



## 非核平和都市宣言

青くすみきった空、清らかな武庫川の流れ、緑あふれる六甲・長尾の山々……。この素晴らしい自然と明るくおだやかな暮らしは宝塚市民すべての願いです。

このような私たちの願いに反し、世界では依然として、人類同士の悲しむべき争いが絶えず、しかも地球上の全生命を滅ぼすことのできる核兵器が蓄積されてきました。

しかし、人類の平和への切実な願いが全世界に高まり、大きなうねりとなって、ようやく戦略核兵器の縮小や、各地域の紛争解決への明るい兆しが見えようとしています。

私たちは、このようなときにこそ、戦争を、そして核兵器をなくし、世界の恒久平和を強く願わずにはいられません。

ここに、宝塚市は憲法の平和精神に基づき、恐るべき核兵器の廃絶を願い、永遠の平和社会を築くことを誓い、「非核平和都市」とすることを宣言します。

平成元年（１９８９年）３月７日

宝 塚 市







平和の鐘

いま、語りつぐ 平和への願い XII

平成29年（2017年）3月発行

編集・発行 宝塚市総務部人権平和室人権男女共同参画課

編集協力 大林宣彦

宝塚市東洋町1-1 電話 0797-71-1141(代表)